

研究の棗

日本古建築研究の棗 (第二十八回)

天 沼 俊 一

第三十三 唐 居 敷 (續)

室町時代

のでは、先づ石製のからかくと、法隆寺東院西門のがさうであらう。たゞあれ丈けでは見當がつきにくいかも知れぬが、扣柱の礎や何か、らさう判断ができるのである。木製のは同寺南大門に、先年の大修理迄は當初のと思はれるがあつたが、これも亦腐朽甚だしく、再び使用ができかねるので、現在のは其通り新材でとりかへたのである

(第二頁)

大和國添上郡大柳生村大字忍辱山、圓成寺樓門は、室町時代でも早い方だと思つてゐるが、あの唐居敷は次時代のところで述ぶる日吉神社樓門の夫れと同様に、孔なしの飾り物である。尤もこの門は今でこそ完全であるが、上層の料拱以上と袖塀とは實は修理の際に補加したもので、大正の初め迄は上層の軸部の上に、直に假屋根がかゝつてゐたのであつた。即ち未完成のまゝに残つてゐた

のであつたから、無論扉はなかつた。扉がなければ唐居敷に孔をあける必要はない。こゝに於いて孔なしの飾物ができたのである。尤もこの場合は、全部完成しても扉をつける意志がなかつたかも知れぬ、といふのはあんな所は、扉を吊り込んでも吊り込まなくても、どこからでも出入は自由であるからである。唐居敷は長方形の最も普通のもので、別段に珍らしい形をしてはゐぬが、實用になかつた一例としてかいておく。

桃山時代

になると少し形の變つたのがある。京都市豊國神社唐門のが夫れで、變つたといつても、其左右相對する方の長邊に僅かに變化をもたせ、上端にも幾分の細工をしたに止るので、これも亦ことによつたら時代が後れるかも知れぬが、同時にこの時代のものとみる理由がある(第二百一、二)。

仙臺市大崎八幡神社の石の間の出入口の唐戸に

は、珍らしく唐居敷が用ひてある。第二百二十二圖に掲げた通り、これは門ではなくて、社殿の一部についてゐるのであるから、新薬師寺本堂のど共に稀な例となし得るであらう。

滋賀縣滋賀郡坂本村鎮座、官幣大社日吉神社樓門は天正十四年建立のものであるが、圓成寺のと同じく唐居敷も幣軸もあつて軸摺の孔があけてない。これは當初から大きな扉を吊込む考へがなかつたゝめである。併し此場合は開放しておくのも工合が悪いといふところから、簡單な半扉を入れてある。けれどもこれは方立から肘壺で開閉する様にしてあるから、唐居敷は前同様全く飾りものである。同攝社大神神社樓門亦さうである。

江戸時代

に於いては、柱は全部のつて了ふ事第二百十五圖の様であるが、また春日神社複廊の門の夫れの様に半分丈けのつたのもある(第二百十、四)。

尤も後者の

例はあれは文久三年造營の時、前例に據つたとす
ると、即ち治承の型を追ふてゐるのであるから、
勿論除外例とすべきだが、これは多分さうではあ
るまい。

其他第二百十五圖のは何れも高野山のものであ
る。其一(同圖)は金剛峰寺總門ので、柱は完全に
唐居敷の上のつてゐる。これは二枚つきではあ
るが、長 $6.12 \times$ 幅 $4.25 \times$ 高 0.75 あるから、全體としては
中々大きなものである。其二(同圖)は大門ので、こ
れは殆んど接せん許りに二つの唐居敷を並べてお
き、其中心柱をたてゝあるから、中心へ柱がある
には違ひないが、一つ／＼別々にみると、普通り
半分のてゐることになる。出入口が隣合つてゐ
て、其間に柱が一本ある場合なら、何もこれに限
つたことはない、いつだつてかういふ結果になる
であらう。

播州加古川に近き刀田山鶴林寺樓門の夫れは、

第二二一圖のを横に用ひた様なもの、即ち普通前
後に長いものなのに、これは左右(さいつても實は左
のものは)に長いのである。上等のものではないが、
様式の變つてゐることは確かである。

第二百二十三圖は大阪市四天王寺廻廊西門の夫
れである。寫真で明らかな通り、軸摺の孔は石の
蹴放の一部分にあけてあり、其兩方から四角な石
をつけて、一見唐居敷の様にしてゐる。甚だずる
い方法で、これは大分に費用の節約ができ、而も
効果は同じ事である。こんなものでも唐居敷とい
へるかどうか知らぬが、形は似てゐるからさうし
ておいてもよからう、さうする先づ第一に
唐居敷に二種類ある。一を真正、他を擬似と
する。
といふ工合に、分類からしてかゝらねばならぬこ
とになるであらう。

第二百二十四圖は同太子殿の南門である。南門

は四脚門で、本柱の下に大きな平たい石があり、其脇の几帳面をとつた角柱の下にも、また平たい面取の四角な石があり、其石に扉の軸摺の孔があけてある。故に二つ一所にすれば凸字形のものであるが、別々にすると大小二箇のを並べたことになる。この場合小さい方は頗る貧弱だが、前例よりは偽物でない丈けよろしい。或人はこれをさして「葦座造出柱石」としてはどうかといつたが、少し長過る許りではなく、どうもこの名は適當とは思へない。

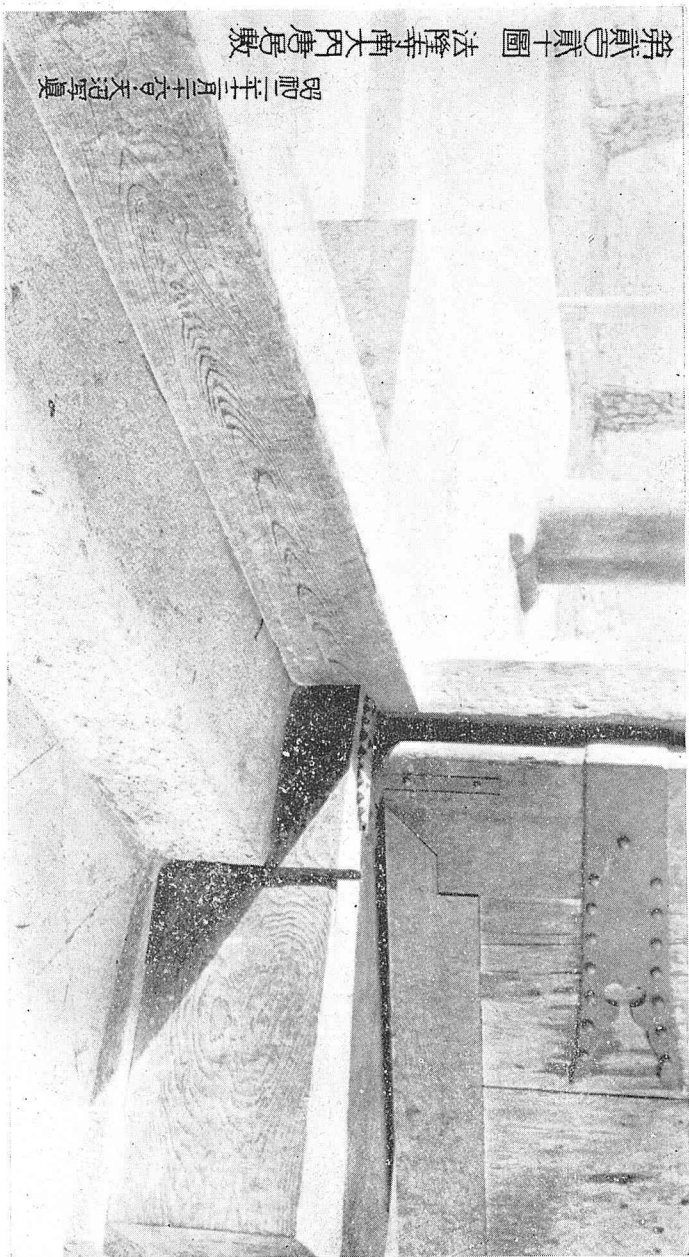
教王護國寺(東寺)大師堂の一廊の北側には門が二つある。其二つの門に型の變つた唐居敷が用ひてあるのを此機會に紹介しておく。

二つの門のうち、北側のは檜皮葺の平唐門で、輪極小舞裏、扣の角柱の面幅は狭いが、男梁女梁輪極は割合に廣い面をもつてゐるし、其上にのつてゐる三つの板墓股も亦古い、即ちこれ等は何れ

も鎌倉位のもので見られぬ事もないやうである。併し他の部分は何れも江戸時代位に見られる。此門の本框は石の薄い四角な板——地の下にどの位入つてゐるか知らぬが、見えてゐるところは薄い板であるから、假りにかう書いたのである——の上にたち、夫れより少しくはづれて其上に特殊の形の木製唐居敷がのせてあり、其上に軸摺の孔をあげ葦座金物を打ち、扉を吊込んである。この唐居敷も亦甚だ薄く、周縁に銅板を巻き鐵鋌で打ちつけてある(第二三三圖)。

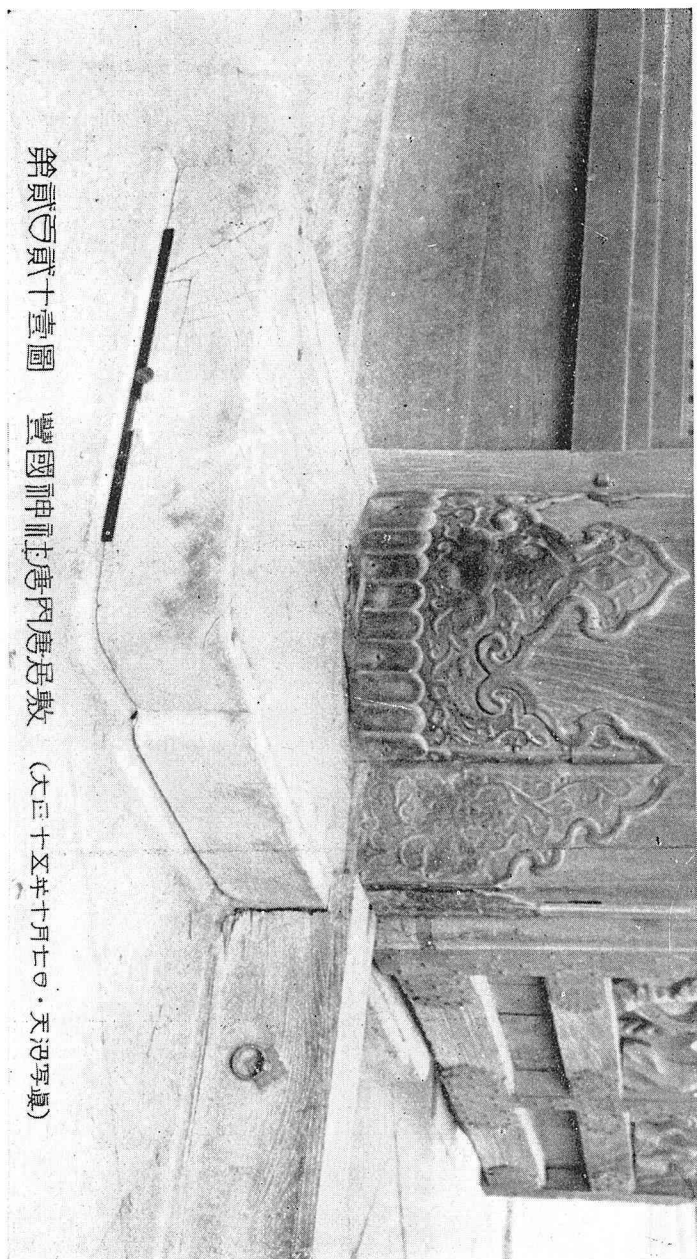
南側のは本瓦葺四脚門、古いところなし。其唐居敷は殆んど北門のと同じで、たゞ茨が一つ少ない丈けである(第二三三圖)。

大師堂を建立した時分には、北門の一部分の様に總て鎌倉式で門も造つたが、其後いろ／＼手入をしたりして、遂に特別の形の今みる様なものを案出して用ひたのであらう。これ等は最初寫眞が



第貳拾圖 法隆寺南大門唐尾敷

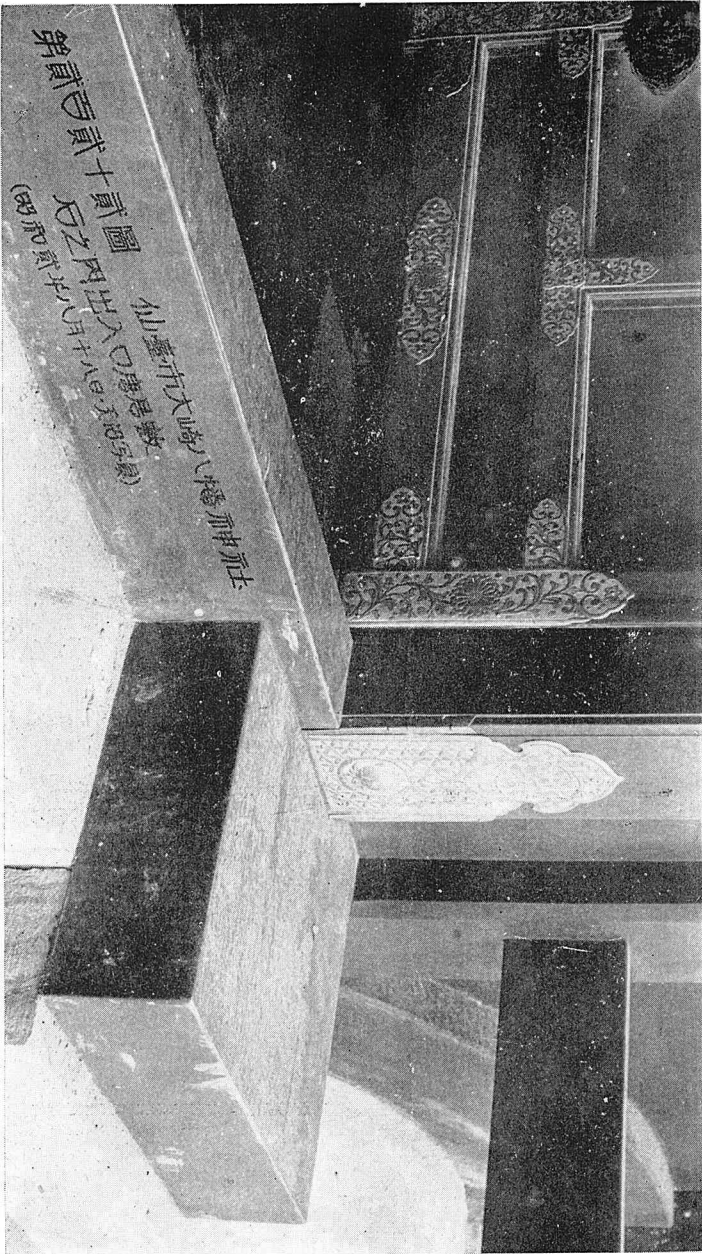
昭和三年三月末撮影

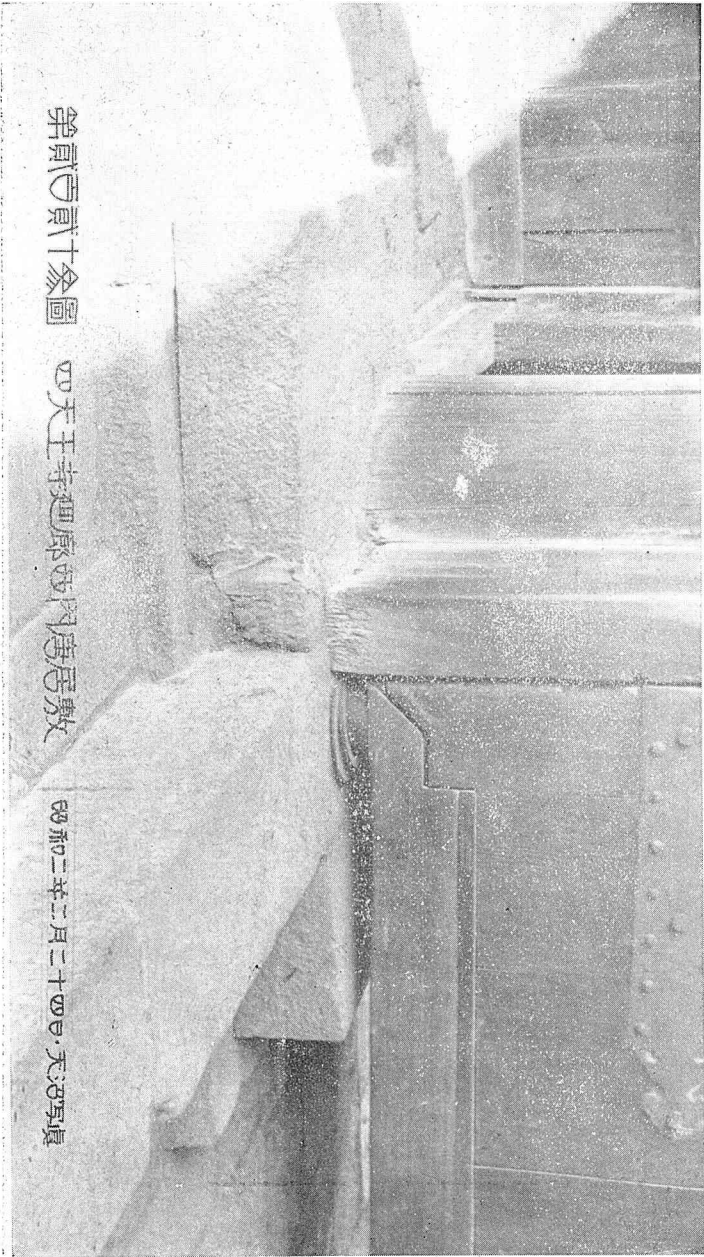


第貳百貳十壹圖

豐國神社内唐居敷

(大正十五年十月七〇・天沼写真)





第百二十參圖 四天王寺迴廊内門唐厨敷

昭和二年二月二十四日天沼写真

第百四十四圖

四天王寺太子殿南門唐尼敷

昭和二年二月二十二日天沼写真



第貳百貳十六圖

福濟寺大觀因左側圓石外側文様

昭和三年三月二十六日・天沼写真



第貳百貳十七圖

福濟寺大觀內右側圓石外側文様

昭和三年三月十六日天沼亨寫





内側文様

第貳百貳十八圖

福濟寺大觀内左側圓石

昭和三年三月二十六日天沼厚真



内側文様
 第貳百貳十九圖
 福濟寺大觀内右側圓石
 昭和三年三月二十六日天沼写真



第貳百參十圖

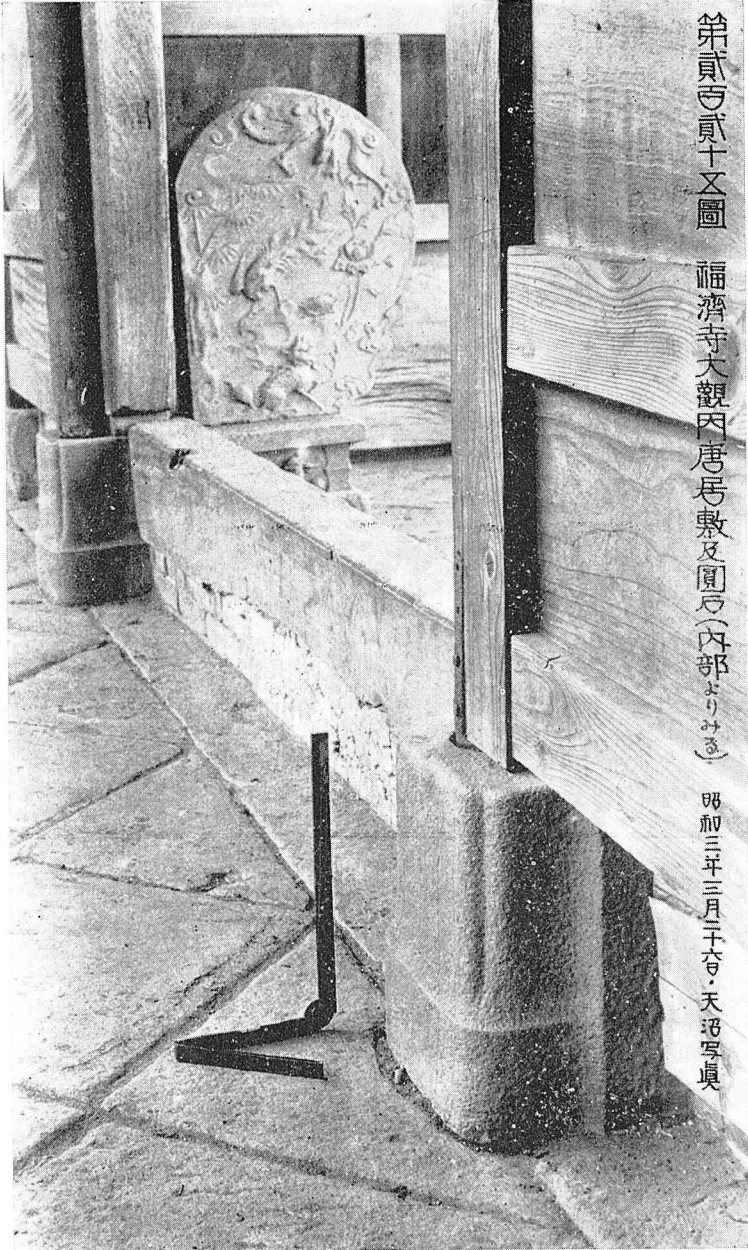
福濟寺大觀内右側圓石(主として花を飾す)

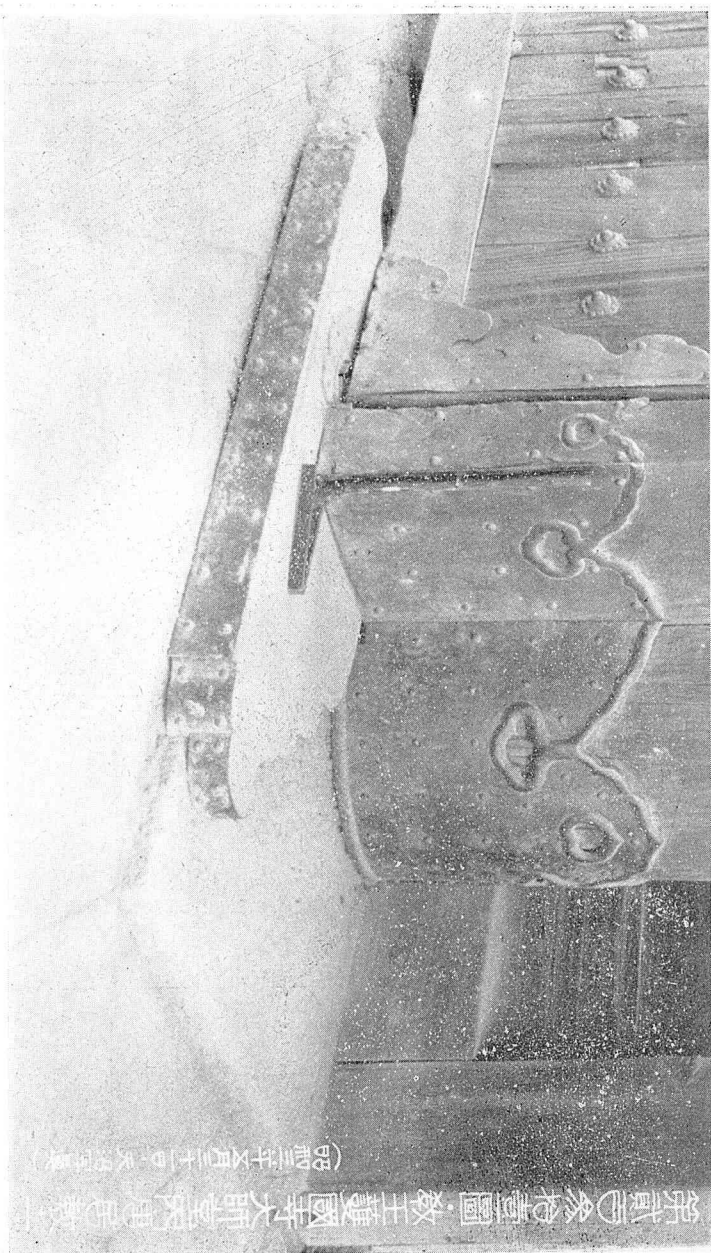
昭和二年三月三十日天沼厚真

第貳百貳十圖

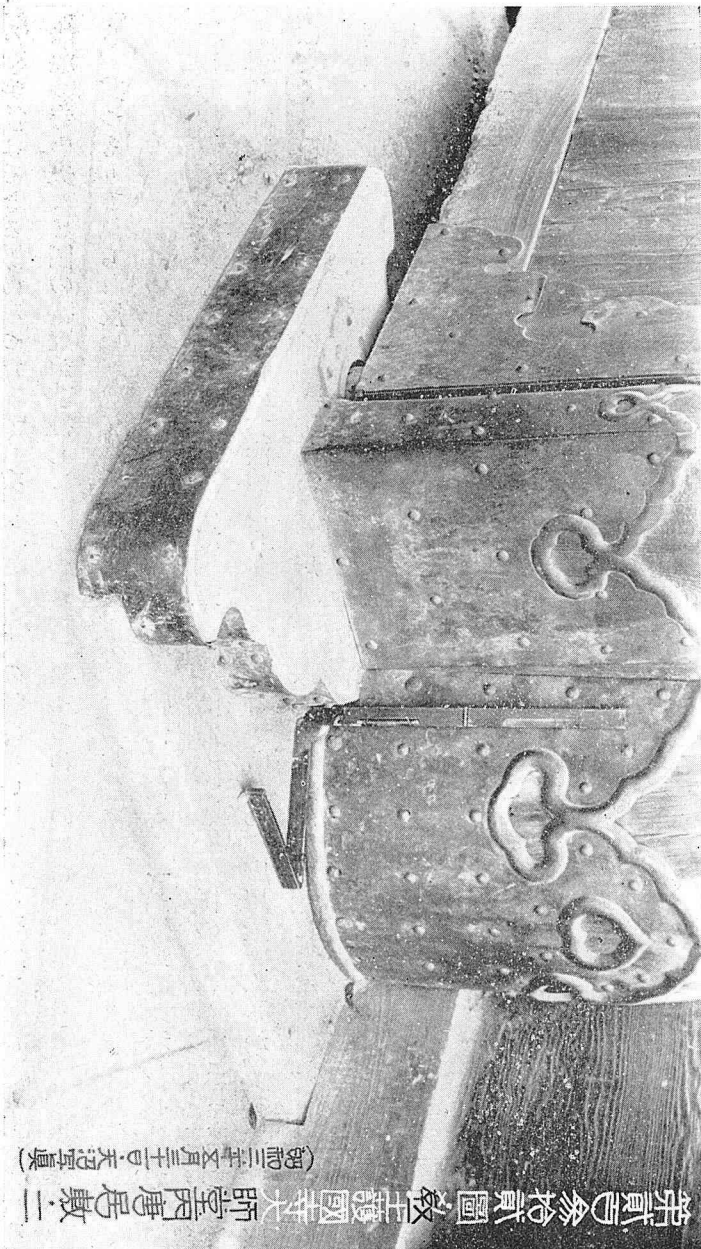
福濟寺大觀内唐居敷及圍石(内部よりみる)

昭和三年三月十六日・天沼亨真





京都府・叡徳園・本主護國寺大講堂内門扉
(昭和五年四月一日撮影)



(京都三十三間堂・木造菩薩)

京都三十三間堂・木造菩薩

間に合はなかつたのでやめるつもりのところ、入れる事が後にできる様になつたので、次に掲げた長崎福濟寺の夫れと圖の番號が前後してしまつたから、其つもりで見られ度い。

* * * * *

江戸時代の木割法による唐居敷の寸法のだし方には、各棟梁によつていろいろの方法があらうが私はよく知らない。こゝには今手許にある雛形本に掲げてあるのを示さうと思ふ。これは柱の直径を單位としたのである。

柱の直径を「一・〇」とすると、高さ「〇・四」、幅「一・七五」、長「三・〇」、さうして圓柱即ち本柱は、其中心が長邊を二等分した線上にあつて、扉より遠い長邊に内接する位置にある様にするのである。

故に柱は完全に唐居敷の上ののつてゐる。普通の堂宮師に、圓柱は唐居敷の上ののるものか、或は

半分位はみだしてゐるものかときけば、半分でたの等はないと言下に否定する位、新しいのは全部のつてゐるのである。

* * * * *

當代にはもう一つ異形のを示し得るので、即ち長崎市福濟寺大觀門のである(第二百二十五圖より。併第二百三十圖まで)。併しながらこれを唐居敷とみるか、或は石製臺座とみるか、夫れは見様によつて何れともとれるであらう。だから後者であるとする人はさう考へればいゝので、私は今は前者とみてこゝに記しておくのである。

此れは二石より成る。一つは下の石で、一方に軸の廻轉するための孔があけてあり、他方は脚つきの臺となつてゐるが、其羽目に當るところに

右方のもの。 唐獅子・鳥・兔

左方のもの。 唐獅子・魚・兔

の順序に、夫れは内側正面外側に厚肉に陽刻し

である、さうして其臺座の上に、大きな平たい圓形の精巧な薄肉彫を施した石がのせてある。其圓形の面は少しく外方に膨んでゐるから、平たいよりは大分に形がよろしい。其面には、

右方。靈芝・蘭・渦文。爵。鳥獸・蜂・靈芝・蘭

松・雲。

左方。靈芝・渦文。鬲。四神・牡丹(?)・靈芝

竹・雲。

等が前同様の順に刻みつけてある。以上の二石から成つてゐるのである。

唐居敷の先がこの様になつてゐるのは、元は支那で朝鮮にもある。支那のはまだこの圓石の上に丸彫の唐獅子がのつてゐる例もある。今問題にしてゐるのは支那の直寫でかう大きいのであらう、さうしてこれは恐らくあちらで造つて持つて來たものであらうと思はれる。

これ等のうち、右方のものゝ内側は主要な模様

であるところの松・猿・蜂が甚だ興味を惹くのである。猿と蜂との割合がいゝ加減であるのみならず、蜂と其巢との比例が同様にでたらめである。其上、他の動物と此等との比も亦當つて居ない。

大阪府三嶋郡清水村の山の上に本山寺といふ寺があり、其寶物に立派な硯がある。傳に足別義政の愛玩品で、松永久秀が拜領し當寺へ寄附したもので、沈南蘋葡萄の硯といふのださうな。墨をするところを除き、一面に葡萄唐草を浮彫にし、其間に適當に栗鼠・蛙・蟋蟀(?)・蜂と蜂の巢・猿等を配してあるが、栗鼠と蟋蟀と同じ位、蜂は猿の半分位の大きさにしてあつたりすると同時に、蜂の巢は蜂に比べて小さい事、とても福濟寺どころではない。これも亦支那製らしく、双方其比例を無視した同じ意匠の猿と蜂と蜂の巢とあることに注意すべきである。

圖でみる通り、精巧な彫刻をした面は少しく起

りがあり、厚も相當で、其厚さのところも亦込み入つた曲線から成つてゐる上、一は筒一は扁を薄肉に刻んである。

此の石を「石敢當」といふさうで、『長崎市史』地誌篇下(二九五・二)に

門の兩側に圓形の石がある。長方形の石の上に置いてある。

その形狀恰も鼓腹の如く、花卉翎毛が巧妙に鑄んである。長崎圖志や長崎名勝圖繪などはこの圓石を石敢當と稱してゐる。……

とあるものであるが、この記事だけでは到底この形を髣髴させることはできない。『長崎圖志』は大學の圖書館にあつたのを借りてみたが、山や川や神社などはあつたけれども、私のさがし様がいけなかつたせいも、この石の事はつい見つけられなかつた。『長崎名勝圖繪』の方は、長崎市役所に一部ある丈けださうで、先日の機會を失つた以上、もう一度出直さぬ限りみることはできぬから、つ

まり今の間にあはぬのを遺憾とする。

大正十三年六月發行、福濟寺現住三浦實道師の編輯になる『光風蓋宇』といふ畫帖にも、殆んど同様の記事がある。曰く

『……兩側なる柱脚へ長方形の臺石の上に置かれたる鼓腹狀石兩基あり花卉翎毛を刻して巧妙を極む長崎圖志並に長崎名稱圖繪に依れば該石を石敢當と稱し居れり。』

とあつて、右側の猿蜂の寫眞を掲げ、其上に「石敢當といふ文字を印刷してある。石敢當につきては『好古日録』に記事があり、『集古十種』に拓本の複製がでてゐるが、夫れは文字である。この唐居敷の一部分の圓いところをなせさういふのか、私にはよく判らない。併しながら三浦實道師は、今でもさういつてゐて、本にもさうかいてあると言つてゐられたのだから、かういふ名で判るのであらう。

支那は清朝時代の、先づ工匠必携とでもいふべ

きものに『工程做法』といふのがある。頗る珍本

で、何十冊かのなさうだが、揃つたのはめつたに
ないのみならず、おそろしく高價なものだといふ

ことである。この本には、この圓い石を『掬鼓石』

と書いてあるさうである(伊藤清造氏談)。掬鼓石とは洵に

適當な名の様に思ふ。石敢當では何だか判らない。

此れは支那で造つてもつてきたか、或は長崎に

ゐた支那の石工がこちらで彫刻したか、何れにし

ても支那人の手になつたものであらう、と私は考

へてゐる。石は青味を帯び、其仕上は水磨きで光

つてゐた。砂岩の一種であらうが、支那の石か日

本のか判断する力がなかつたので、まだほんどう

の事が判らないのは残念である。例へ支那人がほ

つたのでも、日本にある建築に用ひてある以上、

我國の唐居敷の一例としても差支はあるまい。其

文様意匠に捨て難いところがあるので、寫眞を澤

山だしたのである。

* * * *

また唐居敷と藁座と一石より刻みだしたのがあ
るが、ごつちかといふと稀れな方であらう。一例

は東京芝の徳川家靈廟 二代將軍廟拜殿の前面に

あ。四脚門の唐居敷は、普通の場合と同じ様 長

方形であるが、扉軸摺 當るところに恰も藁座の

様な形に半分斗りくり出してある。夫れから其前

面にある廣場に東の方よりの出入のために設けて

ある藥醫門——平唐門で藥醫門であるが、所謂唐

藥居門といへるかどうか判らないから、たゞ藥居

門としておくことにした——は、本柱が八角で其

下に同じく八角形の礎に小さい唐居敷がつき、同

時に天竺様木鼻を背中合せにした木製藁座と全く

同じ形のものが其石から刻みだしてある。以上二

例腐朽の心配はないが、唐居敷とするか藁座の方

へ入れるか、或は兩方兼ねたものとするか、何れ

にしてもよかうが、こんなざららともつかぬものがある事を知つておく必要があらう。

* * * * *

次に前號及び本號にかいたのを簡單にすると次の様になる。

飛鳥時代に於ける唐居敷の有無は未詳であるが、奈良以降出入口の柱下に用ひられたものであつて、石製と木製とあつた。其平面は殆んど總て長方形であるが、稀に例外例として圓形或は其他特殊の形をしたのもあつた。時に或は多くの裝飾的彫刻をした別種の石を加へた美事なものであるが、これは支那の直寫——支那製——であると思はれる。日本式のかゝる手の込んだものは見當らない。石製には稀に藁座を一石より刻みだしたのもある。

(昭和三年八月三十一日稿了)

紹介

●日本史學史 文學博士 清原 貞雄著

我國に於て纏つた史學史の出現は本書を以て嚆矢とする、史學それ自體が既に一箇の史的現象なる以上その發展を研究對象とする史學史の成立すべきは勿論である、殊に我國は千年に餘りてこの學の歴史を有するのであるが從來これに關する著作の甚だ乏しかつたのは寧ろ不思議といはねばならぬ。されば本書の出現は誠に空谷の跫音にも比すべきものであらう。全篇五章、朝廷の國史編纂、平安朝時代に於ける私撰の歴史、鎌倉時代、南北朝足利時代、徳川時代がそれぞれ各章共に一々の史書を中心としてそれらの編纂の由來、體裁内容並に思想を説き背景としての時代思想をも隨時にこり入れてゐる。史學史の構造については種々議論多きところであつて本書の如きもなほ滿さるべき多くの要求をその中に含んで居ると思はれるがこれによつて我國に於ける史學發達の過